

「若者よ、世界に出よう」（12月14日明治大学スピーチ）

国連事務次長、赤阪清隆

本日は、来年2011年には創立130周年を迎えられるという由緒ある明治大学にお招きいただき、大変光栄です。権利自由、独立自治という大学の建学精神は、まさに国連の理想に合致します。国連は設立以来まだ65年しか経っていませんから、明治大学の先駆者の方々の先見の明に深く敬意を表したいと思います。

国連では、つい1ヶ月前に、アカデミック・インパクトという新しい企画を正式に発足させました。世界の大学と国連が協力関係を築いて、ともに世界の諸問題への取り組みを行っていかうというものです。すでに世界90カ国以上、500余りの大学がメンバーになっています。日本からは、7つの大学が参加しているのですが、その先頭を切ってメンバーになっていただいたのが明治大学です。さすが、「世界へ」と門戸を開かれている大学と、感じ入りました。ニューヨークでの初会合には、針谷副学長、川島准教授、石津さんにご出席いただきました。あらためてお礼を申し上げます。

ニューヨークの国連本部で私が勤務を始めてから、もう4年近くにもなります。国連というと何かしかめつらしい、堅苦しいイメージを抱かれる人も多いと思います。私も国連事務局に入るまではそうでした。

ところが、国連事務局の中で働いて見ますと、毎日が刺激的です。こんなに面白い職場は他にないのではないかと思うようになりました。世界中で起きる出来事、たとえばハイチやインドネシアでの地震、パキスタンの洪水、スーダンやコンゴでの紛争、パレスチナ問題、イラン、北朝鮮の核問題、気候変動など、ありとあらゆる問題の解決のために国連が活動しています。世界中の首脳が国連にやってきます。

国連が成立したのが、1945年10月24日です。10月25日が私たち夫婦の結婚記念日でして、その1日前ですので私にとっては覚えやすい日です。1945年の4月から6月にかけて、すなわちまだ日本が戦争を続行している最中に、ドイツまたは日本に宣戦している連合軍50カ国代表がサンフランシスコで会議を開いて、国連憲章を採択しました。

国連憲章前文にあるように、国連は、将来の世代のためにもう二度とあのような世界大戦は起こさせないという決意で作られました。世界の平和と安全の維持、経済、社会の開発、人権の確保の3本柱が国連の大目的です。

「国連」(United Nations)という名は、当時のアメリカのルーズベルト大統領が考えたものです。そのアイデアが浮かんだとき、ルーズベルト大統領は同じ宿舎にいたチャーチル英国首相の部屋に飛び込んで「いいアイデアが浮かんだ」と叫ぼうとしたら、チャーチルはシャワーを浴びている最中で氣勢をそがれたという逸話があります。

ちなみに、国連の色というとブルーを使うのですが、これも当時のアメリカ人が、青は平和の色、赤は戦いの色と思って青にしたらしいのです。色の解釈は国によって違いますし、普通「平和の色は何色か」と聞かれたら、「白」と答える人が多いと思います。戦いをやめて降伏する際は「白旗」を出しますね。スペインの闘牛には赤は戦いの色なんですが、中国では「赤」はめでたい色ですね。

現在国連の加盟国は192カ国で、世界のほとんどの国がメンバーです。米国が欠けていた戦前の国際連盟と違って、世界の大国すべてが加盟国であることがその強みとなっています。そして、すべての国が安全保障理事会の決定を受け入れ、実行に移すことに同意しています。これは国連憲章25条にそう書いてあります。ですので、国連安保理の決定には国際的な正当性が与えられています。そこに、国連とG8、G20などとの最大の違いがあります。

国連の主な組織としては、まず、この加盟国全部が参加する国連総会があります。総会ビルは非常に威圧感があるというか、さすが人類の議場と呼ばれるだけのことはあると思わせる建物です。私は学生の頃、この国連総会場で満席の聴衆の前で演説することを夢見ました。その夢は、それから30年して実現しました。聴衆席は空白が目立ちましたがね。もう少し大きな夢を抱くべきだったかと今になって悔やみます。

次に、15カ国だけがメンバーの安全保障理事会です。アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国の5カ国が常任理事国で、拒否権を持っています。残りの10カ国は非常任理事国で、2年ごとに選挙で選ばれます。国連では、この安保理のメンバーでいるのといないのでは、月とすっぽんぐらいの差があります。安保理のメンバーですと、連日昼夜なく、週日週末を問わず、世界の紛争に対応するための緊張を強いられます。担当する外交官の顔色も変わるほどです。日本は2009年—2010年の二年間、非常任理事国として安保理に参加しています。日本が非常任理事国になったのはこれで10回目で、加盟国の中では最大です。最も、2011年—2012年にはブラジルがやはり10回目の非常任理事国になりますので、日本に並びます。

国連事務局は、加盟国を支える裏方で、国連事務総長は、国連の行政職員の長ということになります。現在、国連事務総長は韓国人のパン・ギムン事務総長です。彼は2007年1月に事務総長に就任しました。パン事務総長は、長年自分の財布の中に、

孔子のいう「30にして立つ、40にして惑わず、50にして天命を知る、60にして耳順（耳したがう）」を記したメモをしのばせていたといいます。パン事務総長は今66歳。彼は、耳順にそって、静かですが、結果重視の堅実な国連外交を進めています。

国連事務局にとって、加盟国は「主人」です。コフィー・アナン事務総長当時、彼が国連ビル内を禁煙にすると決めたことがありました。そしたら、愛煙家のロシアの大使が、「誰が国連の主人と心得ているのか」と怒り、その禁煙の指示は結局執行されませんでした。今その大使はロシアの外務大臣となっています。

「国連事務局にはどれぐらいの人が働いているのですか」と聞かれて、昔国連事務総長だったブトスガリは、「さあ働いているのは半分ぐらいでしょう」といって話題を呼んだことがあります。これはまったく冗談でして、皆よく働きます。今、国連事務局には全世界で約4万4千名の職員が働いており、そのうち5千人がニューヨークで勤務しています。半分以上がフィールドと呼ばれているPKOなどの現場で働いています。

世界各国からの職員が集まっていますから、賑やかです。私の部下も、ドイツ人、インド人、アメリカ人、フランス人、ナイジェリア人など、国際色豊かです。英語が共通語ですが、フランス語も飛び交います。仲良く仕事をするために、皆気を使います。怒らないことが肝心です。腹が立っても相手に「バカ」などと言っては大変なことになります。怒鳴らずにやんわりと注意すること、友人以外には私的なことにはかかわらない事などが大切です。セクシャルハラスメントについては特に注意が必要で、男性が女性に、「夕食に誘いたい」などとしつこく言うようなものなら、すぐに上司に訴えられます。

「国連っていったい何をしているのですか」とよく聞かれますので、小さなカードを配って、国連の仕事を説明することにしました。

国連は、毎日1億人以上の人たちに食糧を配布しています。世界食糧計画（WFP）などが、難民、貧しい子供たちへの食べ物を提供しています。

国連は、世界の40パーセントの子供たちへの予防接種をしており、これで毎年2百万人以上の子供の命が救われています。

このほか、難民支援、気候変動への対応、平和維持、貧困対策、人権保護などリストが続きます。

国連の仕事は大きく分けて、このように現実に開発途上国の現場などで難民や病気の人を助ける作業と、国連本部などで国際的な条約や合意文書などを作る作業との2種類に分かれます。

国連の仕事で職員が強いやりがいを感じ、人々から最も感謝されるのは、現場で直接人々の助けになる仕事でしょう。ユニセフや、国連難民高等弁務官（UNHCR）、WHO、国連人口基金、WFP（世界食糧計画）などがそうです。

他方、国際的な条約や合意文書を作る作業というのは、地味で根気の要る仕事です。たとえば、生物多様性条約のもとでこの間出来た名古屋議定書、地球温暖化防止のための京都議定書、核拡散防止条約や、世界人権宣言、国連ミレニアム宣言などを作るのがそうです。このような合意書を作る作業は相当の年月と、数多くの国際会議が必要です。

私は、1997年の京都会議に田辺政府代表の補佐として出席する機会に恵まれましたが、あれは思い出すたびに冷や汗が出ます。京都会議の最終日、日本にはとても不利なある決定をめぐって、日本代表の席にいた田辺大使と私が「議長」と反対の発言をするタイミングが遅れてそのまま決定されてしまったことがありました。日本にとっては1年で1千億円以上も負担が余計にかかることになる決定です。会議場の別室に陣取った日本政府の幹部から、「何をしているか。その決定を覆せ」との指示がすぐ私の携帯電話に飛んできました。「そんなことを言ったって無理ですよ」というわけにもいかず、「はい、何とか」とは答えましたが、隣の田辺大使に、「大使、これは磔ものですよ」とつぶやいて、辞表という字が頭に浮かびました。それから6、7時間もかかったでしょうか、徹夜で決定を覆すための関係国との打ち合わせを必至でやって、議長の了解を得て再度採決、先の決定を覆すことが出来ました。

国連の会議というと、長々と議論の堂々巡りを繰り返しているとのイメージがありますが、それでもいざ決定となる段階になるとこのように真剣勝負です。二国間の会議では、「賛成できない」とこちらが言えば合意には至りません。しかし、国連のような多数の国同士での多国間外交では、多数決で決まりますから、こちらの主張が少数派であれば負けてしまいます。そうならないように、日ごろから努力して味方を増やした上で決定に向かうという戦略が必要になります。外から見ると無駄な議論を何度も繰り返しているように見えても、その実、結構大変な作業なわけです。

現在の国連の主要課題についてお話ししましょう。

冷戦が終って20年、米国にオバマ民主党政権が出来て2年、世界は国連が機能しやすい時代になっているといえます。米国を含む世界の主要国が、国連を無視した一方的な外交よりも国際協力を重視する多国間外交へと軸足を変化させているからです。

紛争防止や開発問題、人権の擁護などの世界の様々な問題に国連がもっと積極的にその役割を果たすべきという声が世界中で高まりつつあります。イラク、アフガニスタン、ダルフル、ミャンマー、ソマリアなどでの紛争についても、また、気候変動や貧困撲滅などの問題についても、「なぜ国連はもっと積極的に活動しないのか」という国連への期待をこめた世界の声が大きくなっています。

国連が今一番力を入れているのが、世界の貧困の削減です。貧困や幼児死亡率、妊婦死亡率の削減など8つの目標を盛り込んだ「ミレニアム開発目標」(MDGs)は、2015年が目標達成の期限です。

世界にはまだまだ、本当に貧しい人たちが一杯いるのです。今年アフリカのコンゴ民主共和国に出張しましたが、東部の地方の町では電気もなく、水道もない、目を覆いたくなるような貧しい家々が空港を出てすぐに目につきました。一日1ドル以下で暮らす人々が今世界には約9億人もいます。世界の人口は今約69億人ですから、約7人か8人に1人は極端な貧困状況にあるといえます。(目標1)

日本も私たち団塊の世代が育った頃は貧しかったですね。もう50年以上も前になりますが、私の通った大阪の田舎の小学校には、ひどい雨になると学校を休む生徒がクラスに二人ほどいました。家に傘がないので土砂降りの雨の日は学校に来れなかったのです。今世界には、約7千万人の子供が小学校にも通えないでいます。大半はアフリカとインド、パキスタン、バングラデシュなど南アジアの子供たちです。皆学校に通いたいのに、通えないでいる子供たちです。

誰もが皆学校に通えるようにしようというのが目標2です。

ある非政府組織(NGO)がケニアで、成績優秀な小学生に中学校に通うための奨学金を出しています。その中心人物は今国連の職員なのですが、彼の話を通じて直接聞きました。彼自身、スウェーデンの篤志家の援助で学校に通うことが出来たので、自分も貧しい子供を助けたいと思って奨学金を与えることにしたと聞きました。その奨学金を獲得しようと、ケニアの子供はみな必至で勉強するといえます。そうしないと中学校にいけないからです。

また、これもケニアの話ですが、最近マラソンの世界チャンピオンだったポール・テルガットさんに会う機会がありました。彼はケニアの田舎の9人兄弟の貧しい家庭

に育ち、食うや食わずの毎日だったそうです。しかし、国連のWFP（世界食糧計画）が学校の給食を補助してくれたのでその昼食が目当てで学校に通い、そしてマラソンの世界チャンピオンになることが出来たと話してくれました。彼は今、国連の食糧農業機関（FAO）の親善大使をしています。

男女間の不平等をなくそう、女性の力を高めようというのが目標3です。学校、就職、政治の舞台などでの男女差別をなくそうというものです。

今世界で女性が選挙で大統領などの国家元首になっている国は、アイルランド、アルゼンチン、インド、フィンランド、スイス、リベリア、リトアニア、キルギスタン、コスタリカ、そしてつい最近選ばれたブラジルの10カ国です。また、女性が総理などの政府首脳になっているのは、アイスランド、オーストラリア、ドイツなどの11カ国です。国連に加盟している国の数は192カ国もありますから、まだまだ少数です。

国会議員の数では、2010年に世界平均で19%に達しました。ルワンダとスウェーデンでは女性が国会議員の半数に達していますが、これに続くのが南アで下院の44%が女性です。日本の衆議院の総数は480名中女性が54名、11パーセントですから、世界平均よりもかなり低いといえます。

国連では、これまでばらばらだった関連組織を束ねて、「UN ウィメン」という新しい組織が出来ました。来年1月から本格的に活動を始め、女性の力の拡大を目指します。

目標4は、子供の死亡率を削減しようというものです。栄養不良の5歳以下の子供は、世界で1億5千万人もいます。開発途上国の子供の4人に一人は栄養不良で、インドではその数は6千万人を超え、子供の2人に一人は栄養不良です。5歳以下で死亡する子供は、世界で毎年880万人もいます。その主な原因は、下痢、呼吸疾患、マラリア、エイズなどです。

こんなにも数多くの子供が、毎年予防可能な病気で死んでいるのです。きれいな水と、予防接種と、蚊帳と、薬と、病院があれば、この数をもっと減らすことが可能です。

私がWHO（世界保健機関）にいたときに、ミャンマーでのポリオ小児麻痺の予防接種に参加する機会がありました。赤ん坊に口からワクチンを注ぎ込むのですが、他の赤ん坊は大きな声で泣いているのに、私がワクチンをあげた1歳ぐらいの女の子

はにこっと笑ってくれました。「ああこの子はもう一生小児麻痺にかかる心配はないのだ」と思うと、うれしくて涙がこみ上げてきました。

妊産婦の死亡率を削減しようというのが目標5です。妊娠や出産が原因で亡くなる女性の数は、世界で毎年36万人に及びます。これは毎日1000人の妊産婦の命が失われているということです。ほとんどが、アフリカと南アジアの国の女性です。

目標6は、エイズやマラリアなどの病気と闘おうというものです。現在世界でマラリアにかかる人の数は、毎年2億4千万人、死亡者は86万人、その9割近くがアフリカで起きています。日本でも大正時代や終戦直後にマラリアが流行したことがあったようです。マラリアは、妊娠中のメスの蚊が夜に人の血を吸う際に病原体を移してかかる病気です。ですから、夜にハマダラカに刺されなければ大丈夫なのです。私は10年ほど前に国連の会議で、「小さな子供は夜にデイスコに踊りに行ったりしないのだから、蚊帳です、蚊帳さえあれば子供の命を救えます」と叫んだら、会場にいた多くの人から拍手喝采を受けました。幸い、その後国連も数十億ドルにも及ぶ蚊帳キャンペーンを大々的に展開するようになり、今ではルワンダでは5歳以下の子供の56%が、ケニアやマダガスカルでも46%が、殺虫剤を含んだ蚊帳の下で寝るようになっていました。10年前はせいぜい3、4%だったのですから、大きな進歩です。最近の国連の活動の中でもっとも成果を挙げているものと言えるでしょう。

目標7は、環境の持続可能性を確実にし、また、水、トイレの普及を広めるというものです。目標8は、これらの目標の実現のために国際的な協力関係を促進しようというものです。政府開発援助（ODA）の拡大も含まれます。

次に、国連の活動の中でも最も重要な分野のひとつに、人権の保護があります。

1948年に国連総会で「世界人権宣言」が採択されました。その第1条に、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である」と謳っています。すべて人は、人種、皮膚の色、性別、言語、宗教、政治上その他の意見、社会的出身、財産、門地その他の理由で差別を受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる、と。

この世界人権宣言が出来て以来60年以上がたちましたが、世界の現状は必ずしも満足できるものではありません。自由と平等が抑圧されているところがまだまだ一杯あります。連日世界各地で、人権を踏みにじるニュースが後を絶ちません。テロ活動による市民の殺害が続いています。政府に反対する新聞記事を書いたというだけで投獄や暗殺される記者も少なくありません。女性に対する差別もまだまだ世界各地で続いています。100万人以上にものぼる女性の性器の一部切断の蛮行や、人身売買、

紛争地などでの強姦、数十万人にも上る少年兵、児童労働など、目を覆いたくなる人権侵害がまだまだ世界各地で続いています。

ちょうど2年前になりますが、ソマリアで13歳のうら若い女性、アイシャ・ドウフロォが石打ち刑で死亡したというニュースが世界にショックを与えました。報道によれば、彼女は3人の若者に強姦されたあと、助けを求めて村の長老たちに訴えてきたのです。しかし、長老たちは彼女の味方になるどころか、イスラム法に照らして彼女は不貞を働いたということで、石打ちの死刑を命じました。1000人もの村人が見物する中で彼女は50人以上の村人に石を投げられて死にました。このような恐るべき野蛮な行為がまだ起きているところがあるのです。

いま、コンゴ民主共和国、旧ザイールの東部地方では、ひどい人権侵害が続いています。反乱軍の残党が村を襲い、家を焼き、老人子供を殺し、女性を強姦しているのです。すでに数十万人の女性がそのような犠牲になっています。国連平和維持軍がいるのですが、その数1万8千名で、それで日本の数十倍ほどの面積をもった国の治安を守ることは到底不可能です。コンゴ政府の警察なり、軍隊がもっとしっかりしなければならぬのです。私は、今年4月に同地方を訪れ若い警官の訓練所を見学しました。日本の国際協力機構（JICA）がその訓練所を改築整備してくれたのですが、こうした訓練所がもっとも必要です。

次に、国連が対応している平和と安全の問題について触れたいと思います。

日本にいと世界は平和だという気になるかもしれませんが。しかし、国連にいますと、毎日、スーダン、コンゴ、中東、イラク、アフガニスタン、キルギスタン、ハイチなどで問題が生じており、とても平和どころではないという気がしてきます。

国連は、1948年以降、合計63の平和維持活動（PKO）を展開してきました。特に冷戦の終結以後、PKOが数多く設立されるようになりました。1988年以降で49件もあります。現在活動中なのはスーダン、コンゴ、ハイチなど15件です。120近い国連加盟国から合計約10万人の軍事・警察要員が派遣されています。

最近の紛争の多くは、スーダンのダルフルやコンゴ民主共和国のように、国家間の戦争から一国内の部族間や対立グループ間の紛争へと移っています。その結果、PKOの活動も、従来型の停戦監視に加えて、元兵士の武装解除、動員解除、社会復帰や治安部門の改革、選挙支援、文民の保護など多様化しています。日本も参加しているハイチで目下展開中のPKOも、軍事部門に加えて、文民警察、行政、選挙支援、復旧、人権などの任務を与えられています。

アメリカの俳優のジョージ・クルーニーさんは、国連事務総長の任命した平和のメッセンジャーの一人ですが、平和維持活動にことのほか高い関心を寄せて、国連の広報を助けてくれています。

より平和な世界を求めていくなかで、これからの世界はどのように変化していくのだろうかと考えます。1991年にソ連が崩壊して冷戦構造が崩れたあと、自由主義社会は高らかに共産主義への勝利宣言を行いました。「歴史の終わり」が到来したと信じ、世界のどの国も共通の考え方を信奉するのだと、世界はアメリカに率いられて理想社会に近づいていくのだと信じる人がたくさんいました。さらに、物、サービス、資本、人の国境をまたぐ移動の加速化、すなわちグローバリゼーションが、このような動きを早めて、世界の人々は同じものを求め、同じような考えを追求していくと思われました。

あれから約20年経ちました。振り返ってみますと、世界の動きは予想されたようには動いていません。なんと言っても、中国やインドなどの新興国の台頭が急ですし、ロシア、アフリカ諸国、中近東諸国などの政治、経済、社会状況を見ても、世界は必ずしも一本化の方向に動いているとは見えません。

世界各国は、いずれかの将来には同じ最終地点に到着するのかもしれませんが、そこに到達するまでのレールは何本もあるのかもしれませんが、そして、このような多様性に満ちた現実の世界がこれから少なくとも4、50年ぐらいは続くと思えるほうが良いのかもしれませんが。

国連は、普遍的な原則と理想を掲げて世界を良くしていこうとしている訳ですが、このような現実を無視するわけではありません。しかし、国連には、平和を追求するための原則と方法を盛った国連憲章があり、普遍的な人権を盛り込んだ世界人権宣言などがあります。ですから、どの国も何も新しい独自の価値やヴィジョン作りに苦勞することは無いはずで、なんでもかんでも国連を重視するということではなくて、国連の掲げる理想や、すでに合意済みの原則、国際法を遵守するという姿勢が世界各国に求められています。

まだまだ、お話したい問題はたくさんあります。地球環境問題、特に気候変動問題や生物多様性の問題には皆さんも関心が深いと思います。あとで時間が許せば、ご質問に答える形で、お話できればと思います。

さて、国連と日本の関係に移りましょう。

国連に日本は1956年12月18日に加盟しました。当時のソ連の反対で4年間も加盟を阻まれた後のことでした。日本が国連に加盟した時、重光葵外務大臣は国連総会で、「わが国の今日の政治、経済、文化の実質は、過去一世紀にわたる欧米及びアジア両文明の融合の産物であつて、日本はある意味において東西のかけ橋となり得る」との演説を行いました。

日本は国連重視を外交の柱にすえて、これまで多大の貢献をしてきました。現在、米国に続く第二の予算を分担し、その支払いも怠ったことはありません。政府開発援助も最近まで世界のトップを突っ走ってきました。1997年の京都会議や最近の名古屋での生物多様性条約の下での条約交渉のように、難しい国際交渉では、解決策を求めてまさに対立する陣営間の架け橋の役割を果たしてきました。

私も、生物多様性条約のもとで10年ほど前に、遺伝子組み換え作物の国際貿易に関する議定書交渉に参加しました。その時に日本がスイスなどと一緒に属したグループの名前は、なんと「折衷グループ」(Compromise Group)でした。ここまでいくと少し恥ずかしい思いがしましたがね。

しかし、最近の日本と国連の関係を見ますと、不安材料が無いわけではありません。その第一は、すでに過去10数年間にわたって政府開発援助(ODA)が5割近くも削減されていることです。1997年度のODA予算は1兆2千億円でしたが、2010年度のODA予算は6千200億円です。日本のODA実績は2000年までは約10年間世界第1位を誇っていましたが、その後は、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリスに抜かれて、今や世界第5位の座まで落ちました。日本の後にスペインとオランダが迫っています。

なぜ日本が不景気で生活に困っている人がいるというのに、他の国の人たちを助ける必要があるのか、という疑問があると思います。当然です。しかし、先進国が国内総所得の0.7%を国際的な開発援助に寄与するため努力するというのは、国連で合意した国際的な公約なのです。2009年の先進国の平均が0.31%ですが、日本は0.18パーセントにとどまっています。

2009年の日本の一人当たり国民総所得は約3万8千ドルです。これは1年の額ですから、1カ月にして約26万円。0.7%というの、そのうち約1,800円を国際的な人助けのために使うということです。現在の0.18%というの、1月にして約5百円弱です。

「情けは人のためならず」でもあります。最近これを情けは人のためにならないからするなと間違って解釈する人もいますが、もともとは、人に情けをかけれ

ばいずれ自分のところにもいいことが起きるということですね。開発途上国への援助も、彼らの開発が進めば日本に安くて良い製品が入ってくる、そして彼らの日本からの輸入も増えるでしょうし、日本への観光客も増える、そして移民問題や地球温暖化のような問題にも一緒になって対応できるようになります。ここ数十年の日本と東南アジア諸国との関係はまさにそうですね。

国連の平和維持活動（PKO）についても、日本はもっと活躍できるのではないかと思います。現在日本からの派遣は、264名です。人数としては、世界で47番目になります。目下、ハイチに225名、そのほか、ゴラン高原、スーダン、ネパールに日本から派遣されています。全員男性で、女性が一人もいないのが気になります。

先ほど言いましたように、PKOの活動は最近随分多様化しています。日本も、得意な分野、たとえば、運輸、通信、情報など後方支援型の協力とか、需要の多い文民警察、行政、司法、医療面での支援をもっとできるのではないかと思います。PKO予算は、国連加盟国の分担金でまかなわれていますが、2009年度の予算は約58億ドル（約5000億円）で、このうち、米国が27%、日本が12.53%を負担しています。世界第2位の拠出国です。これだけたくさんの資金を出しているのですから、もっとPKOが展開されている地での事務総長特別代表とか、主要幹部にも日本人がほしいと思います。

日本の最近の世論の動きも心配です。米国のピュー・リサーチ・センターが2009年の5月から6月に行った世論調査結果によれば、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパの諸国では国連に好意的な意見が軒並み6割から7割以上を占め、米国ですら61%なのに対して、日本ではわずか45%しか好意的な意見がありませんでした。

2006年の調査での日本の国連への好意的意見は56%でしたから、11ポイントも低下したことになります。「これはどうしたことか」と誰もが首をかしげています。ここで皆さんにアンケートをとってみましょう。国連に好意的な意見を持っていると思う人は手を挙げてください。次に、好意的でない意見を持っている人、手を挙げてください。

それでは、国連は良い仕事をしていると思う人、手を挙げてください。この質問では、アメリカ人は31パーセントしか手を挙げていません。

ニューヨークから最近の日本のマスコミの動きを見ていますと、どうも日本では世界の動きへの関心度が低くなっているのではないかと心配になります。もちろん北朝鮮の核問題や、中国、ロシアとの領土問題には大きな関心が寄せられてきました。これらは直接日本に利害関係が及びます。しかし、スーダンのダルフル地方の紛争、

南スーダンの国民投票、コンゴでの女性への暴力、中東和平といった世界の大問題への関心が薄れているように思えます。欧米のマスコミがこのような問題を大きく取り上げているときに、インターネットで日本の新聞のトップニュースを見ますと、「台所にクマが。ご馳走をぺろり」とか、「居眠り女性客、終電車内に4時間半閉じ込められる」とか、「妻のへそくり平均98万円、夫の3倍」といったニュースが載っています。「え？これがトップニュースですか」と目を疑いたくなります。

大国の条件には、自国以外の問題にどれほど関心を持つかということが入ると思います。その意味では、確かに、アメリカ、イギリス、フランスはさすが大国と思わせるところがあります。これらの国は、スーダンのダルフル地方での紛争に、そして今、南スーダンでの国民投票などに大変な関心を寄せています。スーダンが二つに割れたら、その影響はアフリカ全土に及ぶほか、イエメンやイラクなど世界各地にもいろんな影響が出ると思われるからです。

世界の動きに敏感な堺屋太一氏は、もう3年近くも前に、「日本は急速に衰えている」として、日本の国際的な地位が最近急に衰えだしている現状に警鐘を鳴らしました。学者の中には日本は新興衰退国だという人もいます。国の力は、いろんな形で現れるものですが、最近国連で見る限り、中国、インド、韓国の勢いには、目を見張るものがあります。日本からは予算を削る話ばかり聞こえてくるのですが、韓国などからは元気の出る話ばかり飛び込んできます。G20サミットの主催、世界安全保障サミットの開催、情報通信サミットの開催、国連コンサートの主催、世界模擬国連の主催など、すべて韓国が最近行ったか、近く行うものです。

だれもが、世界のあらゆる問題に貢献できる大国であってこそ、国連の安保理常任理事国入りの資格があると考えます。日本にはそれだけの能力と意思があると信じるからこそ、世界のほとんどの国が日本の常任理事国入りを支持しています。思い起こせば、満州事変の後日本は国際連盟を脱退しましたが、あの国際連盟で日本は設立当初から、英国、フランス、イタリアと共にずっと常任理事国だったのですね。

日本国憲法の前文にも、「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」という一文がありますね。戦後の日本はこの意気込みで国際的な地位を向上してきました。是非最近の停滞感、閉塞感から抜け出して、元気を取り戻し、安保理改革も実現してほしいと思います。

次に、国連の邦人職員について、お話したいと思います。外務省の調べでは、今国連の事務局に他の関連機関も加えての全体では、約740人くらいの日本人職員がいます。このうち国連事務局に限りますと、予算規模などからして望ましい数が今年9月末の時点で約240名なのに対し、現実には約125名しかいません。

もっと日本人職員をとということで外務省も努力を続けているのですが、なかなか改善しません。これは受け入れる国連側にも問題がありますし、送り込む日本側にも問題があります。

国連では日本と大きく違って、人事は、退職したか異動で空いたポストに各国から候補者が応募して、面接を経て採用される制度です。若い人のためには国連の競争試験というのもあります。学位だけでなく修士号を必要とする場合も多くあります。このような競争に勝ち抜いて国連職員になるか、あるいは日本の官庁に所属し、そこからの派遣で国際機関に入るという道もあります。さらに外務省には若い人たちを国際機関に2年間送り込むJPO制度というものもあります。外務省のホームページに「目指せ国際公務員」というコラムがありますのでご参考にしてください。

最後に、日本の若者に訴えたいと思います。

私が国連というものに関心を持ったのは、学生時代に、模擬国連というものに参加したときからです。京都の宝池の国際会議場を使って開かれました。大阪の田舎から、母親と叔母さんが見に来てくれました。叔母さんにはその時に生まれて初めて背広を作ってもらいました。そのとき私は、先に言いましたように、将来、国連の大きな総会議場で満席の聴衆を前に演説をしたいとの夢を抱きました。

国連に入ってから、私が世界各地でこの話をしますと、若い学生さんたちは目を輝かせて聞いてくれました。私と同じ夢を持つ若い人たちが多くことに勇気を得て、2年前から国連自身で世界模擬国連を組織することにしました。去年はスイスのジュネーブで、今年はマレーシアで開催し、世界の学生数百人が参加してくれました。

しかし、今年の場合、中国からは約70名、バングラデシュ、インドネシアなどから各20名、ケニアから22名も参加してくれたのに、日本からの参加者はたった4人でした。それでも、その4人の中に、明治大学から平山 雄人君、杉江 賢君の二人が入っていました。さすが明治大学ですね。1度どんなに小さくても国内外の模擬国連

というものに参加した経験があれば資格があります。来年は8月半ばに韓国の仁川で開催しますので、日本からもっと多くの学生諸君に参加してもらいたいと思います。

今年のノーベル化学賞を受賞された根岸栄一教授は、新聞記者やテレビでのインタビューで、「日本の若者よ、海外に出よ」とおっしゃっていますね。「日本は居心地がよいし、海外のほうが優秀とは限らない。しかし日本を外から見る機会がこれからますます重要になる」と。私はこの意見にまったく同感です。

最近日本の若者が海外に出たがらなくなってきたと言われます。海外留学生の数が年々減少しているといわれますが、特にアメリカへの日本人留学生の数が急速に減っています。日本は1995年ごろは4万人を大きく超えて、アジア最大の留学生数を誇っていましたが、近年、中国、インド、韓国に次々と抜き去られました。最近発表のあった、2009年から2010年の米国への留学生数は、中国が12万8千人でトップです。昨年比30パーセントの伸びです。2位がインドで、10万5千人。3位が韓国の7万2千人。日本は、昨年度比15パーセント減で、2万5千人でした。

また、文部科学省によれば、海外に長期派遣される研究者数が、この数年、ピーク時の約10年前と比べて半分以下にとどまっています。2000年度には1年間で延べ7600人を超えたのに、2009年度では3700人余りとどまっています。

これはなぜなのでしょう。政府の補助金のカットとか、欧米よりも比較的成本の低い中国や韓国へのシフトなどが原因でしょうか？それとも、日本の居心地が良すぎて海外に出たがらない若者が増えているのでしょうか。海外に出て活躍してみようと考えている人、手を挙げてください。

私たち団塊の世代といわれる世代は、1970年代に競って海外へと出かけました。「狭い日本、そんなに急いでどこへ行く」という交通安全ポスターがあったころです。狭い日本から飛び出て、世界に飛躍するのだという意気込みに燃えていました。多くの方が、そのうち日本は世界でナンバーワンの国になると信じて、日本の国際化、日本人の国際化を叫んでいました。

今は、別の意味で、日本人が世界を舞台に活躍することが期待されます。ひとつは、世界が狭くなったことが挙げられます。一昔と違って、今は日本からアメリカに行くのも、ヨーロッパに行くのも、ジージャンに運動靴で簡単に、手軽に行けるようになりました。外国へ行くのに何も必死の覚悟をする必要がなくなりました。世界の大きな都市ではすし屋や日本食店は一杯ありますから、もう日本食にも苦勞しません。

実力を試す分野、たとえばスポーツの世界や音楽、美術、映画、ファッション、アニメ、小説、料理などでも、どんどん世界が小さくなっています。だから、日本一になったところで大したことはない、世界一を皆目指すようになりました。野球、サッカー、アイススケートだってそうでしょう。世界を舞台に活躍してこそ、本当に実力があると認められるような時代になりました。

この間、ニューヨークでヴァイオリニストの五嶋みどりさんのコンサートに出かける機会がありました。ニューヨーク交響楽団と一緒に、それはそれはすばらしい演奏でした。満席の聴衆が立ち上がって、拍手の嵐が鳴り止みませんでした。みどりさんは、国連事務総長から国連の平和のメッセンジャーに任命されています。

世界各地で日本人が活躍できる場所や舞台が増えていますし、実際活躍する人たちが増えてきました。みどりさんや小澤征爾さん、小説の村上春樹さん、アニメの宮崎駿（はやお）さん、ベースボールのイチロー、映画の北野武さん（明治大学出身）など、世界の誰もが知っています。

それでもこのような世界のトップに躍り出るのは一握りの飛び切り優秀な人に限られるでしょう。私が言いたいのは、元気のある日本の若者を待っているところが世界中に一杯あるから、世界に出ようではないかということなのです。大学や、研究機関、国際機関、特に国連がまさにそうです。日本人は、真面目で責任感が強く、しかもチームワークを大事にしますから、どこでも高い評価を得ています。

確かに海外に出るには、リスクやそれなりの苦労はあるでしょう。じっくり考えたら心配はつきません。失敗するかもしれません。強い意思がなければ何事も動きません。英語を話せることも必要です。それでも、中学、高校、大学と英語を勉強しているわけですから、出来ないはずはありません。事実、日本の高校生の英語レベルは格段に向上していると思います。発音は少々ブローケンでもいいのです。

今の若い人たちは幸せだと思います。私たちの世代は、ラジオやテレビの英語教室やテープレコーダー、外国映画などから、必死で英語を探さなければなりませんでした。それが現在では、インターネットを通じて、簡単に英語の新聞、ラジオ、テレビのニュースや映画を見ることが出来るようになりました。私は、仕事柄毎朝、BBC、CNN、フランスのTV5、ニューヨークタイムズ、読売、朝日、日経、NHKなどのニュースをインターネットで見聞きしてから、オフィスに出かけます。英語に接しようという意思さえあれば、無料でこのような機会が一杯あるわけですから、大いに利用することを薦めたいと思います。

世界は狭くなったとはいえ、まだまだ地域によって、歴史や文化が大いに違って、驚くようなことが一杯あります。それでも、言葉さえ出来れば、どの国の人とでも心が通じあえます。私は、これまで、イギリス、マレーシア、スイス、アメリカ、ブラジル、フランスに住む機会に恵まれました。どこでも、皆同じように、朝起きて、朝食をとって、学校へ行き、あるいは仕事場にでて、ランチを食べ、また勉強、仕事をして、家に帰って家族と夕食をとって、風呂に入り、そして寝る。笑い、泣き、悲しみ、怒る。顔かたちや、肌色や言葉は違っても、皆同じ人間だとつくづく思います。問題があっても話しあえば分かります。人間というのはなんと愛おしい存在かと思えます。

世界を少しでも平和なものに、そして人々が豊かな生活を送れるようにするためには、世界の人々がお互いに助け合わなければなりません。自分さえ良ければいいということでは、世界が抱える多くの問題に解決の道はありません。世界には日本人が活躍できる場がたくさんあり、日本人を待っています。日本の若者に、怖がることはない、世界に出よう、そして世界を舞台に活躍の場を見つけようではないか、と呼びかけて私のつたない話を終えたいと思います。ご清聴大変ありがとうございました。